

戦争が廊下の奥に立ってゐる

牧師 山本 護

三好達治の詩『列外馬(1939)』の戦場はおそらく中国。長く降り続いている雨の中、ほとんど物質と化した軍馬が脳裏から離れず、それが時折しくりと持病のような不快を呼び起こします。戦争光景が晴れた夏の入道雲だと、日本本土の原爆投下や敗戦のイメージでしょうか。戦争になると、雨の日も、晴れの日も、昼も夜も、それが続きます。



太平洋戦争を引き寄せた諸々の『列外馬』と同年、渡辺白泉は「戦争

が廊下の奥に立ってゐた」という句を発表。ヌメリとして不快な何かが「立ってゐた」のはどこの廊下の奥でしょうか。欧米列強に対し、神国としての狂信性を昂めていた大本営の廊下か。国防婦人会のおっかさんが切り盛りする家庭の廊下か、白泉が住むしもた屋の薄暗い廊下か。一連の句のために白水は検挙され、転向せずに戦後まで生き延びました。

敗戦直後、白泉の弟子三橋敏雄は「いつせいに柱の燃ゆる都かな」という句を発表。「燃ゆる柱」とは生々しい東京空襲の記憶。それと重ねられる現人神が続べる世の焼失、または天皇の赤子たる己が燃えて斃れるヴィジョンかもしれません。とはいえ、焦土と化した帝都や虚無に陥った己に、どことなく清明さが感じられます。師である白泉の句に通底していた不快な何か、が反転した明るさのようなものを。

「戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない(マルコ 13:7)」。イエスの黙示的な言葉は、神殿崩壊の文脈で語られています。弟子が神殿の壮麗さを讃えると(13:1)、イエスは「一つの石もここで崩されずに他の石の上に残ることはない(13:2)」と応じます。そして紀元 70 年、ローマ帝国との戦争で聖なるエルサレムは「いつせいに柱の燃ゆる都」になりました。

日本国だけでなく世界中が自国主義に傾き、国家間の緊張が増している今日、私たちは「戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない」。それから、あの戦後にありえた「虚無の明るさ」も期待しない方がいい。ヌメリとした不快は焼失せず、幾らでも反転し、廊下の暗がりばかりか、明るい夏の陽の下にも「立ってゐた」のですから。

現代は、「戦争が廊下の奥に立ってゐる」時期かもしれません。イエスの弟子たる私たちは聖霊による十字架の言葉(13:11)を真ん中に据え、廊下の奥の不快を見逃さず、恐れず、いきり立たたず、諦めず、淡々とそれにむかっていきたい。Ω